

文芸特集



たくさんの方の力作の中から選ばれた秀作の一部を紹介します。限られた字数の中に織り込まれた、さまざまな思いや季節の情緒を味わってみてください。

一席

銀色にすすき穂がなびく坂の道介護保険の書類を持ちて

道合 神谷安久子

評 銀色にすすき穂がなびく坂の道は、いま通ってゆく現実の道なのに、渡り来た人生のようにもこれから渡ってゆく自分の晩年のようにも感じられるのだ。その坂道を何枚にも書いた介護保険の書類をたずさえて、作者は登ってゆくのである。

朝の道きまつてつがいの鳩と逢うこぶしの花のあいだを遊びぬ

芝高木2 森田富美子

うつすらと川霧の立つ芝川を越える生徒の自転車列

安行原 高橋 清

一心に励む若さが羨まし たどえ車内の化粧と言えど

安行原 山田 英一

「相棒」を好きでよく見し亡き父をみんな知って家族で見てる

上青木3 岩崎モト子

プールより響き渡るはコーチの声病臥の吾は生きよと聞ゆ

差間2 水戸 正子

こんべい糖をひな人形ににぎらせて淋しい一人の祭り終わりぬ

朝日3 高松 幸江

芝川の有明橋に小波よせ汐の満ち干をスマホにたしかむ

東本郷 石川能志子

それぞれに見ている月を語り合う母とわたしの電話の時間

上青木1 高橋 和江

カエルの声いつの頃から消えうせて家建ちならぶ鳩ヶ谷の町

桜町6 藤波不二雄

ほこり立つ白土茶色に変えてゆく早春の慈雨うるおい持ちくる

坂下町3 川名 佳子

猫背なる背筋をのばしてたたずめば老我を写す街のウインドウ

領家3 森岡 賢吉

見沼沿い力いっぱいペタルこぐ朝日まぶしいボランテアのあざ

鳩ヶ谷本町4 町田 君子

ありし日の母のやさしさ今孫につなげてゆくよ笑つてこらん

辻 田子 千代

風情ある四季の景色が楽しめた町内一の大けやき消える

榛松 木村 昌子

空き部屋がやっと埋まった年寄りで老人ホームと住人笑う

芝下2 中山千枝子

俳句

一席

葉とて母土いじり水温む

芝富士1 小野 隆子

評 百歳以上の高齢者が六万五千人を超えた今日の社会に於いて「介護」の問題は他人事ではない。医学の向上や環境の整備に頼るだけではなく、土いじりや俳句を書いたりすることも、ひとつの元気の素の「薬」である。

若草を摘みて見つけし土手の基地

安行吉岡 會澤 光子

シヤガールの壁掛け飾る春の風

西青木4 青柳 裕美

へび道といひ口ごもる余寒かな

本町4 石野 豊子

やはらかき雨の音にも春が来た

戸塚東1 久須美節子

裏表なきタンポポの光かな

赤井4 倉川 和子

過去未来つなぐは今と咲く桜

新堀 坂本 越子

東風ほのかうなじの髪の解れをり

芝塚原1 佐藤 培代

凜として梅一枝のしじまかな

中青木3 田熊 允雄

花筏砕く鱧長鯉の影

本町1 知念 哲夫

葉を閉じて怒りを納む合歡の花

幸町2 萩原富美江

復興を促すごとく桜花

新堀 浜田 輝子

たんぽぽの石垣なれど咲く強さ

芝1 引間 徳平

葱坊主今日は素直に風のまま

領家2 福島きよの

介護の身そつと着てみる春の服

芝富士2 村井 ミツ

一席

残生の時計の針が加速する

川口1 川久保良治

評 簡潔に切り込んだ一句の余韻。多分に知る年代の実感を率直に吐露して余り有る。加速の実感是个々の老化に基づくものだ。生かされた一日。寝に付く欠伸が今日のファイナーレだ。

地球儀に止まらせてみる青い鳥

飯塚2 川瀬伊津子

付加価値を人に授ける教育費

東川口2 星野 直康

冷凍魚大海原の母を恋う

鳩ヶ谷本町3 加藤 レイ

アルファ基に並のソフトが鷹を生み

戸塚境町 稲垣 洋

言い訳の悔いがさいなむ酒の席

西新井宿 市川いさむ

方言で笑わすガイド五能線

川口4 富田千恵子

胸を打つアニメの台詞人を超え

上青木4 星野 明美

愚痴話日傘の中でそつと聞く

安行領家 原澤かね子

手作りの食事の幸を身に委ね

元郷2 田口 公江

二世帯の孫の仕草に和み合う

安行領根岸 宮崎 忠久

川柳

新井 愁思 選

地球儀に止まらせてみる青い鳥
付加価値を人に授ける教育費
冷凍魚大海原の母を恋う
アルファ基に並のソフトが鷹を生み
言い訳の悔いがさいなむ酒の席
方言で笑わすガイド五能線
胸を打つアニメの台詞人を超え
愚痴話日傘の中でそつと聞く
手作りの食事の幸を身に委ね
二世帯の孫の仕草に和み合う